現代のことば

小原（こはら） 克博（かつひろ）

寒くて暑い世界の中で

暑い夏が過ぎ去り、朝夕には、その暑さを懐かしく思うほどの冷気を感じる時節となった。この夏を振り返るなら、「地球温暖化」という言葉が時候の挨拶（あいさつ）の一部として定着したのではないかと思うほど、頻繁に口の端にのぼった。挨拶の中で交わされる「この異常な暑さは地球温暖化のせいでしょうかね」といった言葉。それは、まるで台風のような天災にでも出くわしたかのような「諦（あきら）め」と、どうしようもないという「無抵抗感」を漂わせていたように思う。

それに追い打ちをかけるかのように、温暖化防止のための京都議定書が定めた日本の数値目標を達成するのは「絶望的」とのニュースが目に飛び込む。しかし幸か不幸か、そのようなニュースに触れても、本当に絶望的になる人は、あまり多くはない。迫り来る危機を認めざるを得ないにしても、その緩慢な足取りから、自分たちの世代は首尾良く逃げ切ることができるという楽観の方がはるかに強いということだろう。

かつて、もっと切迫した形で世界が終わるかもしれないことを感じさせられた時代があった。米ソの冷戦時代、いったん核戦争が始まれば、両国の破滅だけでなく、核兵器によって生じた灰が大気を覆い、「核の冬」が訪れるかもしれないという恐怖に背筋を凍らせた。

昔は「寒さ」に、今は「暑さ」に世界終末の予感が芽生える。また、昔は（核戦争による）「突然の死」に、今は（地球温暖化による）「緩慢な死」に人類はさらされている。ただし、現代はそうした危機から目をそらさせてくれる多様な享楽に恵まれているので、私たちはさほど「痛み」を感じることはない。

終末期医療にたとえて言うなら、ターミナル・セデーション（末期の苦痛の鎮静）の役割を、資本主義的快楽が果たしてくれているのかもしれない。セデーションがたとえ死期をいくばくか早めることになったとしても、誰もが苦痛に身を引き裂かれることなく「尊厳ある死」を迎えたいと望む。資本主義的快楽も、地球温暖化がもたらす「緩慢な死」の恐怖を麻痺（まひ）させ、私たちにいくばくかの幸福感を与えてくれる。しかし、資本主義的快楽が追求されればされるほど、社会は豊かになるが、地球環境は貧困になっていく（二酸化炭素の排出量も増大する）という根源的な矛盾と悪循環の現実から目を背けるべきではないだろう。

田積　司朗

悲観的なことばかり書き連ねてきたが、小さな希望の芽も生え出てきている。環境先進国としてのヨーロッパ各国は言うまでもなく、環境問題から背を向けてきた米国でさえ、その内部においては、州レベルの取り組みや環境NGOの活動が高まってきている。米国は世界人口の4％を占めているが、総エネルギーの40％を消費しているので、その影響力は半端ではない。

世界がまとまっていくために、宇宙からの侵略者を待つ必要はない。「たとえ明日、世の終わりが来ようとも、今日、私はりんごの木を植える」（M・ルター）。植えるべき「りんごの木」は、私たちのそばに置かれていると思う。

（同志社大教授・キリスト教思想）